The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「不安」とは何かを問うために ： フロイトにおける二つの「不安」理論
Author(s)	主藤, しゅう
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 73-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「不安」とは何かを問うために
―フロイトにおける二つの「不安」理論―

臨床哲学　博士前期課程 1 年
主藤　しゅう

はじめに

フロイトは初期の論文「抑圧」(1915 年) において「不安 (Angst)」を、抑圧の結果生じるものとして論じた。「抑圧 (Verdrängung)」とは、それを満足させようとすると一方では快がもたらされるが、他方では不快がもたらされるような「欲動 (Trieb)」を、無意識へと隔絶する心的な働きである。この「抑圧」という作業は完全に行われるものではなく、抑圧された欲動は、いつでも再び意識化される状態のまま無意識下にとどまり続ける。それが何らかの刺激を受け再び活性化した時、その結果として生じるのが「不安」である、というのが初期のフロイトの不安論である。

しかし、後年の論文「制止、症状、不安」(1926 年) (以下「不安論文」と略す) において、フロイトは不安を「抑圧の結果」ではなく「抑圧の動因」として位置づけ直すこととなる。ここにおいて不安は、自我が外的現実に反応して作動させる信号としても捉えられるようになる (不安の第二理論)。

本稿の目的は、フロイトが論じた「不安」に関する二つの理論を整理することである。論述の手順は以下の通りである。第一節において不安の第一理論を抑圧との関係を明らかにしながらまとめる。第二節では、不安の第二理論について「危険状況」との相違を軸に概観する。最終的には本稿において、不安の二つの理論の根底には、「寄る辺なさ (Hiflosigkeit)」が想定されていることを提示することを目標とする。

1. 初期不安論―「抑圧」と「不安」―

抑圧とは、苦痛や不快など自我にとって否定的な感情を体験させられるような思考や観念を無意識化する、自我[1]の無意識的働きである。このような思考や観念は、「欲動」をその源泉とする。換言すれば抑圧とは、自我にとって好ましくない欲動が意識されないようにそれを意識から遠ざける心的な作業のことである。好ましくない欲動とは、その欲動を満足させると一方では快がもたらされるが、他方ではその快を上回るような不快がもたらされるような欲動であり、これが抑圧が行われる条件でもあ

[1] フロイトの自我論には「意識―前意識―無意識」という局所論的モデル (1915 年) 、「エス―自我―超自我」という構造論的モデルなどがあるが、後者は『自我とエス』(1923 年) を待たねばならない。この時点において想定されている自我は局所論的モデルであり、後述する不安信号説は構造論的見地からのものだとみなせるだろう。西園昌久監修/北山修編集代表『現代フロイト読本 2』みすず書房、2008 年、用語解説・索引 (p. xxi, p. liii) 。

る。抑圧により無意識へと隔絶された欲動は、完全に消失するのではなく、無意識下において保持されたままとどまる。

さて、無意識下へと保持されたままの、自我にとって好ましくない欲動は、外部の刺激によってか、あるいはそのような前触れなしに内部から湧き上がってくるかのいずれかのきっかけにより自我へと働きかけてくる。フロイトは治療が必要な症状のほとんどはこの段階で作り上げられるとした。すでに一度行われた抑圧である「原抑圧」を前提としそれを踏襲した形で行われるこの段階での抑圧は「抑圧されたものの回帰」と名付けられる。フロイトは、この段階において生まれる情動状態の一つこそが「不安」であると考えた。無意識下にとどまっている欲動と似通った状況が最近自我に体験されたとき、その欲動は意識に対してある一定の牽引力を発揮する。その牽引力によって、無意識下にとどまっている内面化された欲動が、その想い出や象徴に応じた情動状態として呼び起こされるのであるが、その情動状態の一つに「不安」があると想定したのである。初期の不安論においては、抑圧が不安を引き起こすのであり、不安とは抑圧によって産出されるものである。以上のような「不安」概念は、抑圧したはずの欲動が無意識下へと積み残されたままであり、それが不安を引き起こすことから「うっ積不安学説」[2]とも呼ばれる。

2. 不安の第二理論

フロイトは「不安論文」において、これまでの「不安」概念とは異なる考え方を提示する。不安の第一理論では抑圧が不安を引き起こすとされたが、不安の第二理論では不安が抑圧を引き起こすとされる。端的に言えば、不安は抑圧の結果ではなく、抑圧のきっかけであると考えられる。不安を抑圧の動因として捉える第二理論が新たに提示しているのは、信号としての不安である。ここにおいて自我が抱く不安とは、自我が危険な状況にあることを知らせる信号としての機能を持つものとして想定され、そのような信号が抑圧を引き起こすのである。

ここで、抑圧とは自我にとって好ましくない欲動を無意識的に無意識化する心的作業であったことを思い出したい。初期不安理論では、そのような抑圧の結果として不安が産出されるのであったが、このことが示すのは、不安の源泉は無意識にあるということである。対して不安の第二理論では、不安の源泉は無意識ではなく自我であるとされる。フロイトは、大抵の恐怖症においては自我の不安態勢が第一次的なものであり、それが抑圧のきっかけとなるのだと述べる[3]。さらに、恐怖症の症例において抑圧の動因とされる不安とは去勢の脅威に対する不安であるとされる。

---

[2] 西園/北山、前掲書、578 頁。

[3] S.フロイト「制止、症状、不安」『フロイト全集 19』大宮勘一郎/加藤敏訳、2010 年、36 頁。

症例「小さなハンスの馬恐怖症」[4]において、ハンス少年は「馬に噛まれる」という不安を抱いているとされる。この馬に噛まれるという不安の背後には、父親から去勢されるかもしれない、という去勢不安が潜んでいるとフロイトは分析する。換言すれば、ハンス少年が抱いている「馬に噛まれる」という不安は、「父親から去勢される」という不安の歪曲された代替物である。「不安こそが抑圧を作り出す」[5]という新たな不安概念は、ハンス少年が父に対する攻撃性を抑圧する動因として去勢不安があることを見出すことで説明される。付言すれば、父親を馬へ代替するという歪曲こそが、ハンス少年の不安を単なる情動ではなく、「動物恐怖症」という症状として呼ぶことができる唯一の特徴である[6]。それでは、自我が危険の状況にあることを知らせる信号としての不安は、以上の分析のどこに発見されるのか。また、不安の第二理論で示される「不安」とは、不安信号説にのみとどまるものなのか。

「不安論文」において、フロイトは不安を「現実不安（Realangst)」と「神経症的不安（neurotischer Angst)」に分ける[7]。現実不安とは、外的な既知の危険である「現実的危険」に対する不安でありその危険の核にあるのは物質的な「寄る辺なさ」である。神経症的不安とは内的な未知の危険、すなわち「欲動危険」に対する不安であり、その危険の核にあるのは心的な寄る辺なさである。不安とは、このような危険状況に対する自我の情動的反応であり、かつそこで不安はそのような危険を回避するための信号として機能する。

現実不安と神経症的不安の二つは完全に区別されうるものではなく、両者が混在される事例、言い換えれば、既知の現実的危険と未知の欲動危険が結びついている事例が示される。フロイトは、自我が現実的危険あるいは/および欲動危険の状況にある際、その危険に対して物理的にまたは心的に対処できず、自らが無力で寄る辺ない状況にあると認めた時、それは危険状況と区別される「外傷的状況（traumatische Situation)」であるとした[8]。危険状況と外傷的状況の関係は以下のように示される。不安とはまず外傷的状況すなわち寄る辺なさにおける根源的反応であり、そのような不安が、危険状況、すなわち「寄る辺なさが認識され、想起され、予期された状況」[9]において、助けを求める信号として能動的に再生産される。ここでは、不安の二つの特徴が示されている。一つは寄る辺なさを予期した危険状況において、その危険を避けるための信号としての不安、もう一つは寄る辺なさにおいて体験する根源的な反応としての不安である。不安とは、一方では寄る辺なさという外傷的状況を予見し予期

---

[4] 「ある五歳男児の恐怖症の分析」（1909 年）。
[5] フロイト、前掲書、35 頁。
[6] 同書、28-29 頁。
[7] 同書、93 頁。
[8] 同書、94-95 頁。
[9] Sigm. Freud, *Hemmung, Symptom, und Angst* (1926), G. W. 14, p. 199.（フロイト、前掲書、95 頁）。

するという危険状況においてその危険を避けるために発される救済的信号としての不安であり、自我はこの信号を動因とし自我を防衛する（「不安信号（Signal Angst)」)。他方で不安は寄る辺なさにおいてもしくはその再現の際に抱かれる自動的で意志によらない不安である（「自生的不安（automatische Angst」)。

フロイトはここで、子供が不快な印象に直面した際に、それを遊戯において再生産する例を挙げている[10]。子供は、かつて受動的に体験した寄る辺ない状況を、遊戯を通して能動的に反復する。すなわち、子供がかつて受動的に体験した寄る辺ない状況における不安が、自ら反復し行う遊戯において信号として再生産されるのである。

おわりに

本稿ではフロイトの二つの不安理論を整理してきた。初期不安理論では、不安とは不快な欲動を無意識的に無意識化する抑圧の結果であった。対して不安の第二理論では、不安に信号という機能的側面が付与され、不安は抑圧の動因として解釈され直す。加えて、不安には「自生的不安」という、寄る辺なさあるいはそれに類似した状況において抱かれる自動的な不安であることも示された。すなわちフロイトは「不安論文」において、不安を、危険状況を知らせる救済信号としてだけではなく、自我がそれに対して無力であるような不安反応としても論じた。そして救済信号としての不安と自生的不安のいずれにおいても、寄る辺なさがその根底にあることが示された。

寄る辺なさという概念はフロイトにとって特殊な意味を持つ鍵概念である[11]。「不安論文」以降に発表されるフロイトの文化・社会論においてはこの寄る辺なさという語が頻出する。本稿で取り上げた不安概念は、その根底にある「寄る辺なさ」を共通項として、文化論や社会論への適用が可能であるだろう。

参考文献

S.フロイト「欲動と欲動運命」『フロイト全集 14』新宮一成訳、2010 年
Sigm. Freud, *Die Verdrängung* (1915), G. W. 10, pp248-261
（S.フロイト「抑圧」『フロイト全集 14』新宮一成訳、2010 年）
Sigm. Freud, *Hemmung, Symptom, und Angst* (1926), G. W. 14, pp111-205
（S.フロイト「制止、症状、不安」『フロイト全集 19』大宮勘一郎/加藤敏訳、2010 年）
J.ラプランシュ/J,-B ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1977 年
西園昌久監修/北山修編集代表『現代フロイト読本 2』みすず書房、2008 年
吾妻壮「精神分析における不安をめぐる一考察」『臨床精神医学』51 巻 9 号、2022 年

[10] フロイト、前掲書、95 頁。
[11] J.ラプランシュ/J,-B ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、477 頁。